

第5回 国際フォーラム

～「被災地」から「復興知」～

Living in Disaster Affected Areas gives Living Sapience



2018年10月11日(木)～14日(日)

[報告書]

今年で5回目となる国際フォーラムでは、被災地域が抱える問題を
様々なテーマから議論し、ふくしま・双葉・広野の将来について一緒に考えました。

主催：広野町

共催：学校法人昌平翼 東日本国際大学、学校法人 熊本学園大学、株式会社Jヴィレッジ

後援：復興庁福島復興局、福島県、双葉地方町村会、原子力損害賠償・廃炉等支援機構、一般社団法人日本童謡協会

協力：株式会社福島ガイナ、書店フルハウス 事務局：広野町復興企画課 TEL.0240-27-1251

CONTENTS ◎目次

▶ はじめに	01
▶ プログラム	02
▶ 『被災地からのメッセージ』	03
▶ 開会式	05
▶ 各セッション	08
▶ サイドイベント・交流イベント	22

はじめに

平成30年10月11日(木)から14日(日)にかけて、『第5回国際フォーラム ～「被災地」から「復興知」へ～』を開催しました。

被災から7年が経ち、復興に至る過程で私たちが失い、培い、獲得した社会科学的かつ自然科学的英知、知識、知恵、経験知から出来あがった「復興知」こそが次代に伝えるべき価値であると考え、本年は価値を伝える広域的な連携と効果的な発信手段(映画、音楽、小説、演劇、アニメなど)に焦点を合わせて、取り組むこととしました。

期間中は、交流イベント等を含めた24のセッションにおいて、被災地からの復興を目指す広野町が、様々な行政課題等を町民や来場者の皆様を交えて議論しました。

その結果、最終日には参加者の総意としてメッセージを発信することが出来ました。



PROGRAM ◎プログラム

10/11
[THU]

- ▶ 開会式
- ▶ オープニングセッション「地域振興におけるメディア活用」
- ▶ 広野ドキュメンタリー映画「HIRONO(仮)」初公開
- ▶ 浜通り地域の潜在能力を語る
- ▶ 呈茶席

10/12
[FRI]

- ▶ 廃炉について語り合う
- ▶ 童謡のまち 広野
- ▶ 基調講演「駅前の本屋さんにできること」
- ▶ 県立ふたば未来学園高等学校演劇「Indrah～カズコになろうよ～」
- ▶ ①農作業における放射線対策と健康
②わかりやすい鳥獣被害対策
- ▶ 県立ふたば未来学園高等学校 農業・商業実習販売

10/13
[SAT]

- ▶ 作業員との共生
- ▶ 第24回 ひろの童謡まつり
- ▶ 県立ふたば未来学園高等学校 農業・商業実習販売
- ▶ ワークセンターさくら食品販売
- ▶ 岬学園雑貨販売

10/14
[SUN]

- ▶ 芸術文化を通じた連携と地域振興
- ▶ 広野中学生海外研修報告会 ～異文化体験を通して～
- ▶ 県立ふたば未来学園高等学校 未来創造探求発表
- ▶ 東京大学アイソトープ総合センター 放射線同位元素測定による環境評価研究
- ▶ 地域振興におけるスポーツ活用

常設

- ▶ 広野中学生の映像作品放映
- ▶ 広野火力発電所・IGCC 紹介
- ▶ 広野町の戊辰戦争
- ▶ 全国支援職員の自治体紹介
- ▶ 広野町へのリクエスト
- ▶ スポーツ報道写真展



第5回 国際フォーラム メッセージ

今年で5回目の開催となる広野町主催国際フォーラムは、『『被災地』から『復興知』へ』と題して、“価値を伝える広域的な連携”、“効果的な情報発信手段”を全体テーマとして、4日間で14のセッションと7つのサイドイベント、3つの交流イベントを実施し、参加者と共に闊達な議論を通して、次の知見を得ることが出来た。

ここに、内外に向けて広野町からのメッセージとして発信する。

1. 廃炉に向けた取り組みについて

現状、責任体制、今後の進め方、リスク評価、困難な点、決定していない点、廃炉事業の積立金制度の創設などに関する情報発信の継続、リスクに対する認識の共有が重要であるとの理解に至った。今後長年にわたる廃炉に立ち向かうためには、一方向からの伝える手段に拘泥することなく、双方向に伝わるための創意工夫が必要であり、情報共有と、廃炉に関わる全ての分野における人材育成を、国や民間だけではなく地域の課題としても取り組んでいくこととする。

2. 新技術開発について

当地域は、地震、原子力発電所事故、風評被害が複合的に発生し、世界的にも稀有なアクシデントに見舞われた地域であるが故に、ここから実践的な新しい技術の開発が期待されているところである。

福島イノベーション・コースト構想に基づき、産官学の連携を図って、ビルド・バッグ・ベター（より良い復興）を目指して、次世代の世界に貢献する技術開発について後押ししていく。

3. スポーツを通じた地域振興について

広野町と楢葉町にまたがって存在するJヴィレッジについて、東日本大震災以後は、福島第一原子力発電所事故処理の拠点施設として使用されていたが、本年7月に「新生Jヴィレッジ」として全天候型練習場やホテル棟の増築など装いも新たに再スタートを切った。

当施設について、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催時には、サッカーはもちろん、ラグビー、レスリング、バドミントンなど、広野町や楢葉町のスポーツ施設と共に、各国の事前キャンプ地として使用して頂くべく申請をしている。

世界的なイベントを地域創生の起爆剤とするために、各競技団体や指導者などと共に機運を醸成していく取り組みを進めて行くこととする。

4. 童謡のまちづくりについて

本年も、昨年に引き続き「ひろの童謡まつり」を期間中同時開催し、童謡誕生百年を祝して募集した童謡作詩コンクールにて将来に継承すべく新たな童謡2曲を選び、発表した。加えて、今を生きる子供たちの健やかな成長と未来を託す子供たちへ豊かな情操や創造性を育てていくまちとして「童謡のまち」宣言をした。さらに、志を共にする兵庫県たつの市と「童謡の里づくりのまち」交流協定を締結し、共に全国に向けて新しい童謡の魅力を発信していくことを誓った。

今後も「童謡」および「童謡のまち」については、これからのまちづくりにおいて“広野らしさ”を形作るための継承すべき基礎としていく。

5. 復興に関する地域からの発信について

第1回国際フォーラムから共通するテーマである「被災地から何を発信するか」について、本年は、具体的に浜通りの持つ可能性に言及した上で、福島イノベーション・コースト構想と連動した技術とアートを融合した芸術祭開催や、東京の支部ではなく復興途上の地域に根差した演技者たちによる浜通りでの演劇祭開催、内外訪問者との協同と交流を通じた地域に根差した芸術祭の実施アイデアなどが参加者から公表された。また、浜通りの新しい姿を創出するための、情報共有、地域の連携、参画する者の力の結集、何よりも発信し続けることの重要性が示された。

広野町は、東日本大震災の復興のフロントランナーとして常に新たな風を取り入れ、地域での連携を視野に入れつつ、何を伝えていくべきなのかを模索しながら、継続的な被災地からの発信に今後とも努めていく。

以上のフォーラムを通して得られた知見から、我々は、この地域が豊かな伝統と文化に基づく智慧を内在する可能性に富んだ地域であることを確認した。それと同時に、遠くを展望するためには、まず足元である、ふるさと広野町を大切にしていくことが重要であることを認識した。

被災から7年が経ち、復興に至る艱難辛苦の過程で我々が失い、培い、獲得した社会科学のかつ自然科学的叡智、知識、智慧、経験知から成る「復興知」こそが次代に伝えるべき価値であると考えている。これを伝えるため、これを基盤とし、再生から創生へ新たな価値観を加えつつ、次世代が幸せを感じられる新しいまちづくりに邁進することを、同じ時代にここで生きる我々の責務とするものである。

平成30年10月14日

第5回国際フォーラム「被災地」から「復興知」へ
参加者一同



開会式

- 日時 平成30年10月11日(木) 10:00～11:00
- 場所 広野町公民館(大会議室)
- 司会 小松 和真(広野町復興企画課)
- ご来賓 復興庁福島復興局 次長 實國 慎一 様
原子力災害現地対策本部 副本部長 由良 英雄 様
福島県避難地域復興局 局長 金成 孝典 様
広野町議会議長 黒田 政徳 様
- 参加者 約100名

1 主催者あいさつ



広野町長
遠藤 智氏

国際フォーラムは今から4年前に開催いたしました。当時は帰還して2年が経過する中、広野町内に子供たちの姿はありませんでした。どのようにしてこの被災地から広野町を、ふるさとの生活を取り戻すことができるかということを考え国際フォーラムを継続してきました。第1回、第2回と世界の研究者の方々にご来訪いただき、町民の方々が生活する仮設住宅で共に食事を交わしながら、原発被災地の実態を経験いただきました。第3回と第4回は福島第一原子力発電所の収束のため世界の英知を結集し、地域から考えメッセージとして発信しました。これまでに取り組んできた情報を共有し、地域連携を図るという「力の結集」こそが大切だと考えております。

今回のテーマである「復興知」は、これまでの経験値や知恵と今回のフォーラムにおける様々な英知から生まれる価値であり、それらを次のステージに向け進化させるとともに、今回の第5回国際フォーラムをもって国際フォーラムを終結したいと考えております。

現在、広野町は帰還率が87%、みなし居住率が140%台と緊急時避難準備区域が解除されてから7年と半年を迎え復旧、復興、そして再生から創生というステージをしっかりと進めていきたいという思いでおります。本日ご来訪頂いている皆様の様々なお立場からご進言、ご教示、ご指導を賜りたいと存じます。そしてセッションを通して、次年度への新たな取り組みに繋いでいきたい。そのように念頭するところでございます。

今被災地は復興へ道半ばで苦しい状況にありますが、来年の春には県立ふたば未来学園中学校が開校するなど双葉の復興に向けた新たなポテンシャルの形成が成されつつあります。人材の育成が何よりも大切であり、次代を担う子どもたちを地域をあげて育て、安心して暮らせるまちづくりに着手していきます。皆様のご理解とご協力を今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



2 ご来賓あいさつ



復興庁福島復興局 次長
實 國 慎 一 氏

今回の国際フォーラムは広野町がこれまで復興に向かうなかで得た知識や経験などを「復興知」とされ、これを世界に向けて幅広く発信する。また自らも地域が目指す将来像について考える。というまさに今、この町が置かれている状況に相応しい内容だと思っております。そして広野町さらには双葉地域の復興の姿を世界に発信することにより多くの方々との交流が深まっていくことを期待しております。

広野町では今年の7月にJヴィレッジが一部営業を再開いたしました。先程町長のお話にもございましたが、来年度は県立ふたば未来学園中学校が開講予定となっております。一方、広野駅の駅舎改修や西口整備など継続して取り組んでいく課題があることも事実であります。こうしたなかで町では今月からみなし居住率というものを公表されました。双葉郡内での復興や廃炉、こうした関連の事業に携わっていらっしゃる作業員の方々も含めた広野町の状況を伝えていく趣旨だと伺っております。今回のフォーラムのなかでも作業員との共生というテーマでパネルディスカッションが行われると伺っております。

福島復興局といたしましては、広野町の皆様に今後もしっかり寄り添いながら、また関係機関と連携しつつ復興に向けた取り組みをひとつひとつ着実に推進していくことが出来るよう引き続き全力で応援して、対応して参ります。



内閣府原子力災害現地対策本部 副本部長
由 良 英 雄 氏

震災から7年半、8年というようなタイミングになって参りましたが、今丁度復興庁原子力災害対策本部関係の中では10年経過した時の復興の取り組みのあり方についての議論も始まっているところでございます。そういったなかで福島の復興についてはまだまだこれから取り組まなければならないことが沢山あり「これからだ」という認識を政府のなかでも共有をしていただいているところでございます。

広野町におかれましては町に町役場が戻られて6年、7年というところになっておりますが、いち早く復興に取り組まれ、双葉地域の復興再生の先陣をきって取り組んでいただいております。双葉郡のなかでも広野町の取り組みが成功していく、さらに地域の発展に繋がっていくということが福島の復興に向けて大変大事な先陣をきっていただいているというように考えておまして、これからも広野町の取り組み、或いは各自治体の皆さんの取り組みを精一杯、私ども、国としてもご支援していかないとはいけないというように考えているところでございます。

本日から4日間開催されます国際フォーラムでは地域振興やまちづくり、除染、廃炉関係の作業員の方との共生、或いは再生から創生へのステージにある広野町の今後の取り組み、いろんなテーマで講演や意見交換が行われると伺っております。地元の高校生による報告会や発表もあるというようなことで、これからの地域を担っていく未来のある子供たちの活動であり、自ら見て、聞いて考えたことを発信する。こういった取り組みが本当に大事な取り組みだと感じているところでございます。

原子力災害現地対策本部といたしましても、関係機関と連携し、引き続き広野町をはじめとする双葉郡の復興に向けて尽力をしていきたいと考えております。



福島県避難地域復興局 局長

金成 孝典氏

東日本大震災から7年7ヶ月が経過いたしました。この間、広野町におかれましては、いち早くインフラの復旧や公設の商業施設「ひろのてらす」の開設、広野駅東側の開発など町内の生活環境の整備を進められ、また今年7月にJヴィレッジが再開し、来春にはふたば未来学園中学校の開校が予定されるなど、復興再生に向けた動きに力強さが増して参りました。これもひとえに先頭に立って指揮を執ってこられた遠藤町長を始め、町議会、町職員の皆様、復興事業に携わっておられる関係者の皆様、そして町民の皆様のご努力、ご労苦の成果であり、改めて、深く敬意を表します。

今回5回目の開催となるこの国際フォーラムは広野町、双葉郡の将来を想像し、現状の課題解決や気づきを得ること、正確な情報を地域外、海外に発信することを目的にこれまで様々な分野のイベントが多数行われてきております。こうした被災地が抱える課題の解決に向けた議論や地域の資源をいかした交流機会の創設に広野町が率先して、先頭にたって取り組まれていることに感謝を申し上げます。県といたしましても、今後も国や地元市町村と連携しまして、被災地の復興再生に全力で取り組んで参りますので皆様方には引き続きお力添えをお願い申し上げます。



広野町議会議長

黒田 政徳氏

昨年の第4回国際フォーラムでは参加された一人一人の広野町に対する熱い思いを感じられ、地域間での情報共有や広域的な連携の必要性についての議論はとても有意義なものとなり、大変心強く感じることができました。今回も広野町、さらには双葉郡が抱える様々な現状と課題について広域的な観点から活発なご意見とご進言をお願い申し上げます。

町議会といたしましても、町の復興、そして被災地全体の再生が一日も早く図られますようお願いいたします。今回参加されております皆様におかれましては、町の復興と被災地全体の再生の知識と知恵をご教示くださるようお願い申し上げます。

3 ご臨席

- ◎福島県相双地方振興局 局長 佐々木 秀三氏
- ◎福島県ふたば復興事務所 所長 鈴木 修二氏
- ◎学校法人昌平鬘 東日本国際大学 経営企画部長 草野 幸雄氏
- ◎福島工業高等専門学校 副校長 芥川 一則氏
- ◎ふたば未来学園校長 丹野 純一氏
- ◎広野町議会副議長 北郷 幹夫氏
- ◎広野町議会議員 塩 史子氏
- ◎広野町議会議員 門馬 巧氏
- ◎広野町議会議員 門馬 まりえ氏
- ◎広野町議会議員 遠藤 浩氏
- ◎広野町議会議員 北郷 伯弘氏

◎オープニングセッション

地域振興におけるメディア活用

日時 平成30年10月11日(木)11:00～12:30

場所 広野町公民館(大会議室)

登壇者 浅尾 芳宣(株式会社福島ガイナ 代表取締役)

参加者 約100名



1 概要

1. 福島ガイナについて

(株)福島ガイナックス(現在は(株)福島ガイナへ事業移管)は、もともとガイナックスの第二スタジオとして海外と連携できるスタジオを地方に作る計画があり、震災後、自分の故郷である福島にスタジオを持ってきたいと相談し、廃校を活用したスタジオとミュージアムが実現したもの。

福島や東北の中からアニメになるもの、漫画やキャラクターになるものを発掘して、自治体、企業と一緒にコンテンツをつくって、新しいファンを増やし、観光客やサポーターを獲得していく。これが地方からの新しい可能性と、福島ガイナが復興に協力できることではないかと考えている。

2. 「政宗ダテニクル」(伊達市)

伊達市から、新しく魅力を知ってもらえるものが欲しいとの相談をいただき、伊達市は伊達家発祥の地ということで、伊達政宗とイケメンの先祖が登場するという、若い女性向けアニメのアイデアができ、「政宗ダテニクル」が実現した。女性に人気が高い声優を起用し、インターネット番組配信で有名な方にオープニングテーマを歌ってもらっている。上映イベントやライブには、多くの女性に参加してもらうことができた。

城跡への写真スポットの整備、公用車のラッピング、イラストコンテスト、グッズを作る権利を伊達市の住民、企業にオープンにして商品を作ってもらったりと、2年半ほどやってきて、地域に浸透してきたと思う。

海外のアニメイベントに毎年10～15回くらい呼ばれるので、その度に政宗ダテニクルを上映しており、福島の実情を説明することもある。

3. 「食べちゃったっていいのにな」(福島県)

福島県から農林水産物の風評被害払拭のために、プロモーション用のアニメの依頼があって制作したもの。直接これは安全ですよというよりは、キャラクターやストーリーで興味を持ってもらい、メディアを通じて勉強してもらって、自分の判断で口に運んでもらえればいいと考えている。

スペイン語、フランス語、英語、中国語でも作っており、全世界トータルで500万近いアクセス、特にフランスからは70万ほどのアクセスを頂いている。

4. アニメ作品と地域振興

埼玉県久喜市の鷲宮神社が舞台となったアニメでは、神社の初詣客が10万人から47万人へ増加し、放送後3年間の経済効果が22億円、岐阜県高山市が舞台となったアニメでは、年間の経済効果が21億円と言われている。

こういった作品は、初めから地元と協働して作った訳ではなく、作品に人気が出たところで聖地となるので、連携のスピードが遅くなったり、連携しきれなかったり、連携しても作品と共に忘れられてしまうようなこともあるので、どのようにして持続させていくのかという課題もある。

5. 今後の取組

福島イノベーション・コースト構想をモチーフにした、レスキューアカデミアという子供向けアニメを企画しており、テレビシリーズとして全国放送することを目指している。福島を舞台として、子供達がロボットと一緒に防災や新エネルギーについて学びながら、救助活動するアニメで、キャラクターの候補には広野町をイメージしたキャラクターもいる。

この作品に興味を示している国の子供も登場させて、海外への発信もしていきたい。新しいコンテンツを通して福島復興、そして海外へと繋がって、地域を盛り上げて行けたらと考えている。

2 クロージング(まとめ)

- ・アニメは地域と連携し、多くの来訪者を呼び込む可能性があること、さらに、日本のアニメは海外への発信力が強く、政宗ダテニクルのような地域のアニメであっても海外に広がっていく可能性があることが示された。
- ・浅尾氏の、アニメによって福島の復興、地域の活性化に貢献しようという想いが、参加者の心に響いた講演であった。

◎セッション

広野ドキュメンタリー映画「HIRONO(仮)」初公開

日時 平成30年10月11日(木) 13:30~16:00

場所 広野町公民館(大会議室)

登壇者 島田 隆一(映画監督)

國友 勇吾(助監督)

参加者 約70名



1 概要

1. 第1部／広野ドキュメンタリー映画「HIRONO(仮)」

震災後の広野町を舞台に、この地に住む住民の営みを撮影したドキュメンタリー映画を監督のご厚意で一般公開前に広野町でいち早く公開した。

2. 第2部／トークセッション

広野ドキュメンタリー映画「HIRONO(仮)」に携わった島田隆一監督、國友勇吾助監督に登壇頂き、撮影でのエピソードを語っていただいた。

島田 現在も編集中であり、東日本大震災により甚大な被害を受けた双葉郡、広野町の現状を映画の中でどこまで説明するのが非常に難しい。震災後、多くのジャーナリストやメディアが被災地を取り上げていたが、自身はあの当時カメラを向けることはできなと感じていた。しかし、広野中学校の映像制作に講師として参加し、住民や町関係者等多くの方々と接したことで、残すことの必要性を感じた。

國友 ここに至るまでに監督と編集者との大変な作業を間近でみており、本日広野町で公開出来たことを嬉しく思う。映画の中では、町内の若者が子供会や伝統文化の再開のために奮闘する姿や想いに感銘を受けた。これは広野町だけではなく、全国各地で文化を継承しようとする方々がたくさんいる。これは地域が存続するためには必要なことではないかと思う。

2 クロージング(まとめ)

震災後の被災地に焦点をあてた作品は数多くあるが、映像は被災地の現状を伝えることや記録として後世に残すという点で非常に重要なツールとなる。一方で、作り手にとって非常に扱いづらいテーマでもあり、表現によっては誤解を招く恐れもある。描きたいことや伝えたいことをどのように表現するか。今回セッションで、島田監督、國友助監督に直接話を聞くことで制作側の苦労や葛藤を直接知ることができた。

◎セッション

浜通り地域の潜在能力を語る

日時 平成30年10月11日(木) 16:00～17:00

場所 広野町公民館(大会議室)

登壇者 浅尾 芳宣(株式会社福島ガイナ 代表取締役)

福迫 昌之(東日本国際大学 副学長)

若松 謙維(参議院議員)

遠藤 智(広野町長)

丹野 純一(県立ふたば未来学園高等学校校長)

参加者 約60名



1 概要

丹野 本校では1年次に双葉郡内の被災地ツアーやフィールドワークを行い、地域の課題を題材にした演劇に取り組み、2・3年次には生徒が自らテーマを設定し、地域の課題を解決するプロジェクトに取り組んでいる。生徒たちは復興とは何かということを中心に考え、自分たち(住民)が主人公の社会をいかにして作っていくかということに様々なアプローチからチャレンジしている。ドラマ、演劇、スポーツ、アートなどを教育のなかに取り入れていきたい。

本校には浜通りの子どもたちだけではなく、会津、中通りからもたくさん子どもたちが集まり一緒に学んでいる。その中で浜通り、福島県の枠を飛び越え、グローバルな観点で議論できている。そういった子どもたちの力を活かしていくようなアプローチを地域の皆さんとともに考えていきたい。

浅尾 復興の次のステージへ進むため、浜通りの復興がキーとなるのではないかと。今後、浜通りにどう人を戻していくのではなく、浜通りに新しいイメージを創生して、そこを応援してもらおうという考えで取り組んでいる。

平成30年3月から5月までいわき市のアクアマリンふくしまで開催したアートとテクノロジーが融合した作品の展示会「テオ・ヤンセン展」には14万人の来場があり、このイベントで人は浜通りにも足を運ぶことが実証できた。いわき市がハブになるかもしれないが、ここから浜通りの北に向かって魅力発信ができるのではないかと考えている。アニメ以外にも芸術やカルチャーの面から新しい浜通りの魅力を作っていきたい。

若松 現在、福島県で進められている「イノベーションコースト構想」は国家プロジェクトであり、福島を先駆けとして2040年までに100%再エネでエネルギー供給するという壮大な計画である。浜通りでは、南相馬市のロボットテストフィールドはじめ、廃炉研究施設、風力発電、浪江町の水素工場など様々な施設があり、広野町にもIGCC(石炭ガス化複合発電)が建設される。エネルギーを福島県から首都圏へと供給するという従来のエネルギーモードを全く変える仕組みで、その発祥地がこの浜通りである。私たちの生活を変える可能性を持つエネルギーを地域の強みにしてもらいたい。国も全面的に支援していきたいと考えている。

遠藤 来春、Jヴィレッジがグランドオープンすることで、被災地にとってはゼロベースから新たに大きな交流人口が生まれることになる。これに向け、各町村が来訪される方々を迎え入れる体制(スタディツアー等)を整えていきたい。

今年度、新潟県で開催された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を見学し、芸術祭に関わる人々がふるさとを愛し、力を結集して芸術祭を作り上げる姿を見て来た。被災地であるこの双葉地域においても各町村の歴史・伝統文化があるため、それらを芸術で繋ぐことはできないかと考察している。このような取り組みを今後1つ1つ形にしていきたい。被災地の自治体として大事なことは、現場（被災地）に立ち、自らが決めるという前向きな意思を持つこと。そのためにも関係団体と情報共有をし、産官学金労言が連携して様々なことにトライしていくことが今後の時代を乗り越えていく大きな力になるのではないかと感じている。

2 クロージング(まとめ)

福迫 浜通りの潜在能力＝地域資源の潜在能力になると考えられるが、様々なものがある中でやはり「人」というところが1番大きいのではないか。それは元からずっと住んでいる地域の住民だけではなく、国内外含め様々な外からの力であると感じている。そういった人材、地域資源をどうやって活用していくか、本セッションではそれぞれの立場から意見をいただくことができた。ぜひ何らかの形で発信できれば、それをきっかけに色々な展開が出てくるのではないか。

◎セッション

廃炉について語り合う

日時	平成30年10月12日(金) 10:00～11:30
場所	広野町公民館(大会議室)
登壇者	山名 元(原子力損害賠償・廃炉等支援機構 理事長)
参加者	約50名



1 概要

- ・動画を通じて、福島第一の状況を確認。
- ・原子炉内は低温に保たれ、発電所構内96%は一般作業服で作業できる安全な状態。
- ・廃炉とは汚染水対策や使用済み燃料の取り出しなどの取組を通じて、リスクを継続的・速やかに低減し、最終的には建物が解体されることであることを確認した。
- ・廃炉に向けた責任体制について、政府や東京電力、原子力規制委員会、原子力損害賠償・廃炉等支援機構(NDF)などの役割を説明した。
- ・使用済み核燃料・汚染水・燃料デブリ・放射性物質の状況や対策について説明した。
- ・廃炉に取り組むのは福島第一だけではなく、チェルノブイリやセラフィールドなど、実例、先行例は多数あり、世界と連携して取り組むことができると説明した。

2 クロージング(まとめ)

- ・廃炉作業を進める中で、浜通りが元の故郷としての価値を戻すのは当然のことながら、新しい浜通りを次の世代の人たちに創っていかねばならない。
- ・放射能による風評被害を防ぐためには、放射能に関する正しい知識を持ち、健康被害の発生確率を他のものと比較できるものさしを共有することが重要である。
- ・本セッションを通じて、地域の皆様に福島第一の状況や廃炉に向けた取り組みについてより深くご理解いただけたと思われる。

◎セッション

童謡のまち ひろの

日時	平成30年10月12日(金)11:30~12:30
場所	広野町公民館(大会議室)
登壇者	伊藤 幹翁(一般社団法人日本童謡協会常任理事、作曲家)
参加者	約50名



1 概要

大正7年(1918年)7月1日、鈴木三重吉は「子供に分かりやすくかつ最高の芸術を」との非常に高い志のもと文芸雑誌「赤い鳥」を創刊し、今年で童謡誕生100年を迎えた。これを契機に、野口雨情、北原白秋、西条八十といった多くの詩人の手により世に童謡が生み出された。西条八十の作詩による「カナリヤ」は童謡の第一号と言われている。

今年、兵庫県たつの市と広野町との間で「童謡の里づくりのまち」交流協定が締結された。童謡を愛する両者が協定を結び、お互いの曲を演奏したり広めたりすることは大変喜ばしいこと。今後、このような動きが広まり、多くの自治体にネットワークが広がったら日本中に童謡が溢れていくのではないかな。

童謡は、人生の時間の関わり方が瞬発的ではなく、非常に奥行きがあり長い時間かかるもの。広野町もたつの市も自分たちで一生懸命に現代の童謡をつくろうとしている。広野で開催されている童謡作詩コンクールでは面白い詩がたくさん生まれている。世界中に子供の歌はあるが、今でも毎年1,000曲以上作られているのは日本だけである。

全国の自治体では殆ど独自の歌を持っていない。広野では、独自の歌を幼稚園から唱っている。彼らが親となり子や孫へ…と繋がるには時間がかかる。しかし、歌い継がれていくことで計り知れない大きな財産となるのではないかな。

2 クロージング(まとめ)

童謡「とんぼのめがね」の舞台である広野町では、平成6年より童謡によるまちづくりに着手し今年で25年目を迎えた。今年が童謡誕生100年の節目の年であり、伊藤氏の講演を通して改めて童謡が歩んできた歴史と奥深さを知ることとなった。

童謡の普及には時間がかかるものだが、兵庫県たつの市との連携協定のように、同じ目標を掲げる地域や組織との連携を図ることで、より広く、大きな効果を発揮できる。“童謡”という日本の財産を大切に守り育てることが次の100年に向けた未来に繋がる。



◎基調講演

駅前の本屋さんにてできること

日時 平成30年10月12日(金) 13:30~15:00

場所 広野町公民館(大会議室)

登壇者 柳 美里(芥川賞作家・フルハウス店長)
山田 徹(映画監督)

参加者 約100名



1 概要

1. 小高に本屋を開いた理由

- ・原発事故が起き、警戒区域が閉ざされると報道された時、母から聞いていた田子倉ダム(只見町)の底に沈んだ集落と警戒区域が重なり、閉ざされる前に福島第一の正門前まで行った。その後も被災地を訪問しているうちに、南相馬の臨時災害放送局の方からラジオへの出演依頼があり、「柳美里のふたりとひとり」という番組をスタート。番組に小高工業高校の先生が出演された縁で、高校での講義を依頼され、放送局の閉局までラジオ番組を続けるためにもと、当時住んでいた鎌倉から原町に引っ越した。その後、小高工業が小高産業技術高校になって小高に戻るという話を聞き、当時の町は真っ暗で、何かあったときに駆け込める場所が必要だと思い、本屋だったらできるのではないかと思った。
- ・インタビューで必ず、小高に住むことになった理由を聞かれるが、積極的に流されてますと答えている。受け身な感じがするかもしれないが、私は韓国籍で、父と母は朝鮮戦争の戦火に巻き込まれて日本に来て、流れてきた先々で人の縁につながって生きてきた。流れていく先でつながった縁に、私はすごく強いものを感じる。

2. 本屋について

- ・本も被災している。津波で自宅の本が流されたり、警戒区域のお宅では雨漏りで腐って、野生動物に踏み荒らされたり。無書店地帯なので、本屋にはかなり遠方からいらっしゃる。
- ・本の扉を開けてその中の世界は別世界。一番たくさん扉が並んでいる場所、あらゆる世界の別世界の入り口が連なっている場所が本屋。子供にとって世界っていうのは家と学校しかないが、本屋があれば世界は無数にある。それを示す場所が本屋だと思う。

3. 演劇とこれからの活動

- ・ふたば未来学園の演劇部と一緒に「静物画」という劇を作った。21歳の時に書いた戯曲を生徒達のために大幅に書き直したもの。生徒達にはそれぞれの震災の記憶があり、それを大事にしないといけないと思った。
- ・「町の形見」という演劇を行うが、南相馬の70代の男女8人とプロの役者が二人一組になって記憶や体験を伝えるという芝居。語り部では伝えきれないこと、語りたくないことがあると思ひ、俳優が当事者と共に伝えることが、理にかなっていると考えた。
- ・今後も演劇を続けていきたい。浜通りの原発周辺地域に、被災地観光ではなく、演劇ファンに演劇を見に来てほしい。2020年に常磐線が全線開通するタイミングで浜通り演劇祭を開催したい。演劇祭は継続し、浜通りに演劇を見に来る人達が集まるような祭典にしたい。演劇を志す子供には、地元に残って演劇を続けられるよう道筋を見せたい。

2 クロージング(まとめ)

震災後、南相馬市小高区に移住し、本屋を開いた柳美里さんの、出会った縁を大切にして「積極的に流される」生き方、被災地に暮らす人達への想い、演劇を通して浜通りに人を呼び込んでいきたいという話に、参加者は感銘を受けた様子であった。

◎セッション／ふたば未来学園高等学校演劇 「Indrah～カズコになろうよ～」

日時 平成30年10月12日(金)
15:30～17:00

場所 広野町公民館(大会議室)

発表者 県立ふたば未来学園高等学校演劇部

参加者 約70名



◎セッション ①農作業における放射線対策と健康 ②わかりやすい鳥獣被害対策

日時 平成30年10月12日(金) 15:30～17:00

場所 広野町公民館(小会議室)

登壇者 ①石田 順一郎(福島県除染アドバイザー)
②小野 司(福島県農業総合センター)
大野 光(双葉農業普及所)

参加者 約30名



1 概要

①農作業における放射線対策と健康

放射線の基本的な知識から、農産物への放射性物質の移行低減対策、農業従事者の被ばく対策、農作業の再開に当たっての放射線についてよくある質問と回答を説明した。

②わかりやすい鳥獣被害対策

イノシシ、ツキノワグマ、ニホンジカ、ハクビシン、アライグマ、タヌキについて、体長、学習能力、行動の特徴などについて、動画等を使いながら説明した。

2 クロージング(まとめ)

①農作業における放射線対策と健康

農業従事者の被ばく線量管理として、耕起や収穫等土壌の舞い上がりによる吸入、手に付着した土壌粒子の摂取に対する対策として、特にマスク、手袋の着用を推奨。農地の除染として行う表土の除去や表層土と下層土の反転耕起は、被ばく低減にも有効。

②わかりやすい鳥獣被害対策

- ◎田・畑・家庭菜園などでの対策 ・防護柵で農作物を守る ・収穫残さを放置しない
- ◎集落での対策 ・集落環境診断をして、被害状況や改善点を地図に書き込み、対策を話し合う
・藪などの刈り払いを行って、野生動物に潜ませない ・エサ資源の除去

◎セッション

作業員との共生

日時 平成30年10月13日(土) 10:00~12:00

場所 広野町公民館(大会議室)

登壇者 高木 亨(熊本学園大学准教授)

鈴木 すみ(居酒屋経営)

小池 匠一郎(復興従事者)

島 翔太(県立ふたば未来学園高校2年)

大和田 美月(県立ふたば未来学園高校1年)

猪狩 裕一(広野町環境防災課長)

参加者 約50名



1 概要(3年前、作業員は怖いイメージ)

高木 廃炉、除染、土木関係の方を「作業員」と呼び一括りにし、何やっているか分からないと怖がっている。背景には、コミュニティが避難によって壊れ、それを取り戻せないまま他所からたくさんの人たちが入って来た恐れと不安によるものだった。前のシステムが壊れてしまって、元に戻すだけではなく、より良い形で戻すこと、その戻り方、戻し方も含めて考えたい。

鈴木 居酒屋をやっているので、復興従事者と接する機会がある。当初は町民よりも多く、県外ナンバーの車が目立ち、仮設宿舎、アパートが増え、店にも飲みに来るようになった。早朝勤務、残業、宿舎と仕事場の移動でストレスが溜まるなど話を聞いた。「作業員」のイメージは悪いが、その方々がいなければ廃炉、除染など復興が進まない。

小池 山梨県から来た復興従事者です。建物の解体業と廃材のリサイクル業を行っており、最初は宮城県南三陸で津波堆積物を片付ける仕事した。ゼネコンが福島へシフトしたことで3年前から広野へ、感想は夜になると人がいない、店が開いてない。昼間になると道路は大渋滞するので、これみんな復興従事者なのかと感じた。

島 ふたば未来学園高校で社会企業部の部長を務めている。社会起業部は地域を知り、伝える、盛り上げることを目的に活動している。震災を見て、聞いて、感じて学ぶ、気づきを伝える若者たちの学習会への参加、校舎内の放射線量の測定、イベントへの出店をしている。

大和田 同じ社会企業部内のカフェチームに所属している。カフェチームの目的は、地域に開かれた学校づくりの目玉となる交流の場を提供すること。小さな子供から高齢者まで年齢や性別、職業を問わず地域の方が集える場所を創りたい。

猪狩 原子力事故の放射能汚染から、いち早く放射線量を下げ安心して帰還できる環境をつくるため、町の担当者として除染作業を発注し業務を行った。当時は1日約1000名以上の方が除染作業に携わっていた。

2 クロージング(共生の課題と解決)

鈴木 仮設宿舎、アパート、飲食店など建っているけど、今後、原発に近い町に宿舎が増えて復興従事者が移動したら、広野の宿舎、アパート、飲食店は経営が成り立つのか不安である。

猪狩 広野町は双葉郡復興の先駆者として、様々な事業を進めてきた。「作業員」の問題、宿舎の乱立、これから広野以北においても同じような状況や問題が出てくる。広野の事例を参考にして、復興を加速させてほしい。

高木 町内には2000人以上の復興従事者が住んでいるのだから、故郷に戻るにしろ広野のファンになって帰ってもらえるようなことが出来れば良い。交流というのは難しいですか。

小池 全国から来ている一人として、何が大事かという道で会って挨拶することだと思う。宿舎の周りで誰かを見かけると、知らない人でも挨拶する。そうすれば、お互い顔が見えてくる関係になる。

島 最初は駅に作業員がいて怖いと思っていた。毎朝顔を合わせるようになって、挨拶する関係になったら怖くなくなった。お互い理解するためにも最初は挨拶から始めていけば良い。

猪狩 伝統の祭りが震災で休止していたが、神輿の担ぎ手に復興従事者や高校生も加わってこの春に復活することが出来た。氏子や地区の青年団が行っていたお祭りを継承するために、この地域に居住するみなさんと分け隔てなく交流できれば、多くの問題解決に繋がる。

高木 いろいろ状況が変わってきた。広野が目指す方向、この地に必要なもの、いろんな世代をまとめる、繋げていく接着剤のような役割を誰がどう果たすのか。それぞれすれ違ったりしている中で、ひとつに集える交流の場があると良いと気づいた。地元の居酒屋、未来学園のカフェ、町のイベントがきっかけになる。でも実は身近にできる挨拶だった。色々難しく考えるよりも「おはようございます」、「こんにちは」から始めるのが基本中の基本だったことを再認識させられた。

◎第24回 ひろの童謡まつり

日時 平成30年10月13日(土) 13:30～16:00

場所 広野町中央体育館(アリーナ)

出演者 【出演者】眞理ヨシコ、高橋寛、西山琴恵、渡辺かおり、上雅子

【出演団体】広野幼稚園、広野小学校、広野中学校、合唱団めじろたち(広野町)、
四倉おかあさんコーラス(福島県いわき市)、MJCアンサンブル(福島県南相馬市)、
瑞木小学校(埼玉県三郷市)、タウベン・コール(山形県山形市)

【音楽監督・指揮】伊藤幹翁

【指揮】岡崎肇

【演出】牛山剛

参加者 約900名



◎セッション

芸術文化を通じた連携と地域振興

- 日時 平成30年10月14日(日)9:30~11:00
- 場所 広野町公民館(大会議室)
- 登壇者 津田 大介(ジャーナリスト/メディア・アクティビスト)
南郷 市兵(県立ふたば未来学園高等学校 副校長)
渡邊 晃一(福島大学教授)
松本 正人(広野町教育長)
- 参加者 約70名



1 概要

◎津田

- ・最近、各地で開催されている芸術祭の特徴は、アーティストが地域住民の生活に根差した資源を発見し、それを活かした芸術作品を住民と協働で制作しており、地域内外のボランティアがサポーターとしてまちづくりに関わっている。来訪者による経済効果だけでなく、地域の人に関わることによる地域振興の効果が大きい。
- ・アーティストは地域の影の面にも光を当てるため、原発の問題を取り上げる可能性がある。
- ・すぐに成果は出ないため、結果が出なくても続ける意思が必要。

◎南郷

- ・東日本大震災後、新潟県の越後妻有地域で開催されている大地の芸術祭を廻って、中越地震で被災した地域が芸術で連携し、地域の人々が運営に関わる姿を見て、感銘を受けた。
- ・大地の芸術祭で、海外の芸術家が福島を表現した舞台は酷いもので、悔しい思いをした。一方、会津の漆の芸術祭で披露された、福島の土を使用した土壁の作品は、素晴らしかった。外からの印象で作品を創るのと、被災地の中から作品を創るのとでは異なるのではないか。
- ・福島から後世に何を伝えていくのかは、まだ言語化できていない。言葉にならないものをアートで表現するということに、可能性があると考えている。

◎渡邊

- ・大地の芸術祭に参加して、芸術祭の素晴らしさを知り、福島ビエンナーレの取組みを始めた。大学生が携わることを考慮して、2年に1回の開催(ビエンナーレ)としている。
- ・行政の継続性は重要。首長が変わると予算が確保できなくなるということが起きている。
- ・地域の方に納得して参加してもらわないと、負担だけが大きくて、花火を打ち上げるだけのお祭りになってしまう。
- ・地域で運営する側の人材を育てていくことが重要で、今取り組んでいるところ。

2 クロージング(まとめ)

◎芸術祭の効果

- ・芸術祭は、交流人口の拡大による経済効果が見込まれるだけでなく、運営に携わる地域の方々が協働によって連携が深まることも大きな効果となる。

◎芸術祭の実現にあたっての課題

- ・地元の方の理解と協力 ・行政の継続性
- ・芸術家が、原子力発電所事故を題材とした作品を制作しようとした場合の対応

◎芸術祭実現に向けて重要な点

- ・地域の方へ丁寧に説明し、納得して参加してもらうこと。 ・短期間で成果が出なくとも、継続していくこと。
- ・運営する人材の育成。

◎セッション

広野町中学生海外研修報告会 ～異文化体験を通して～

日時 平成30年10月14日(日)11:10～12:40

場所 広野町公民館(大会議室)

登壇者 藤本 正樹(株)グローバルアース代表取締役

発表者 広野中学校2年生

参加者 約100名



1 概要

中学生海外教育派遣事業の総まとめとして、『国際フォーラム～

「被災地」から「復興地」へ～ Living in Disaster Affected Areas gives Living Sapience』にて報告会を開催した。

昨年に引き続き、中学・高校教諭としての経験を活かすとともに、世界を学び自らを深めるため100を超える国と地域を訪問してきた藤本正樹先生にファシリテーターを務めていただき報告会がおこなわれた。

はじめに、事務局より一連の事業及び現地カナダでの研修の流れについて説明し、その後、4つのグループごとに様々な体験から学んだこと・感じたことを発表した。事後研修で学んだプレゼンテーションのポイントや立振舞いが活かされ、質疑応答では予想外の質問にも団員たちは自分の意見や意志をしっかり持ち、自分の言葉で一生懸命伝える姿が見られた。

2 クロージング(今後の海外教育交流派遣に向けた課題)

現地研修に伴う事前・事後研修については、生徒一人一人が海外に行く目的や目標を明確にし、帰国後は目標をどのくらい達成できたかアウトプットする十分な時間が必要。また報告会では、海外研修の成果として、できる限り英語での発表を目指したい。

◎セッション

県立ふたば未来学園高等学校研究発表

日時 平成30年10月14日(日)13:30～14:30

場所 広野町公民館(大会議室)

発表者 県立ふたば未来学園高校生徒

参加者 約60名

1 概要

①未来創造探求班

テーマ「双葉郡の祭りを復活させよう！」

祭りで神輿を担ぎながら避難経路を確認してもらいスムーズな避難に繋げる。

- 【今後の課題】
- ・地域活性化とコミュニケーション力を祭りとう組み合わせるか。
 - ・広野町の祭りを全国にPRする。



②マイプロジェクト

テーマ「双葉郡の特産品を使って化粧品を作ろう！」

化粧品を通して女子高生に双葉郡を知ってもらう。

- 【今後の課題】
- ・化粧品を共同開発してくれる双葉郡の企業を探すこと。
 - ・双葉郡の特産品を作っている人を見つけること。

③社会起業部カフェチーム

来年度に完成するふたば未来学園高等学校新校舎でのカフェの運営の説明や4つのグループに分かれてディスカッションを行った。

- 【グループ1 雰囲気】
- ・「学校」という閉じられた空間なので、入りやすい雰囲気にしてほしい
 - ・学校内と外だけではなく、外部同士が繋がれる場にしてほしい
- 【グループ2 企画】
- ・生徒と地域の人と一緒にできるイベント
- 【グループ3 値段と商品】
- ・地域の特産物、ふたば未来学園オリジナル商品
 - ・値段については生徒、校外など誰をターゲットとするか。
- 【グループ4 サービス】
- ・割引き、無料、Wi-Fi、学校までの移動手段

2 クロージング(まとめ)

今回発表した3つのプロジェクトは、いずれも双葉郡を盛り上げようと高校生達が自ら考え奮闘する姿が非常に印象的だった。また、彼らのアイデアを地域住民に発表する良い機会となった。特にグループディスカッションでは高校生に触発された参加者達も本気で考え非常に多くの意見が出された。参加者達の生の声を取り入れ、内容をブラッシュアップしていただき、今後のプロジェクトに活かしていただきたい。

◎セッション

放射線同位元素測定による環境評価研究

日時 平成30年10月14日(日)14:30~15:30

場所 広野町公民館(小会議室)

登壇者 和田 洋一郎(東京大学総長補佐)
井伊 博行(和歌山大学教授)

参加者 約30名

1 概要

環境中の汚染物質の濃度を調べる際、苔や海藻を調べるという方法がある。水の汚染物質の濃度は低く、検出が難しいが、苔や海藻は濃縮するので検出しやすく、また、長期的な環境の状況が分かる。

水性昆虫で汚染物質の濃度を測定できないか調べていたところ、成長するにつれて重金属を排出していることが分かった。これは、脱皮を利用して体に有害なものを排出している可能性が高く、そこから蟬の抜け殻を調べれば、土中の汚染物質を測定できるのではないかと考え、研究を行っている。実際に蟬の抜け殻の重金属を調べたところ、場所によって大きな差があり、工場跡地の抜け殻からは高い値が検出された。蟬の抜け殻を使えば、土壌の深いところの状況が分かる。

全国的に展開していきたいと考えており、放射性物質についても調べられると考えられることから、福島でも蟬の抜け殻の調査を行ってはどうか。



2 クロージング(まとめ)

蟬の抜け殻という意外なものを利用して、土壌の深い場所の汚染状況を把握しようというユニークな取組に、参加者は強い関心を示していた。

◎セッション

地域振興におけるスポーツ活用

日時 平成30年10月14日(日) 14:30～16:00

場所 広野町公民館(大会議室)

講師 上田 栄治(株式会社Jヴィレッジ 代表取締役副社長)
西嶋 弘之(元Jリーガー、原子力損害賠償・廃炉等支援機構)
渡部 友幸(福島県レスリング協会理事長)
上遠野 博(福島県ラグビー協会副理事長)
佐藤 和也(広野町職員)
磯部 智史(広野町職員)

参加者 約60名



1 概要

上田 Jヴィレッジは1997年オープンした、ピッチ、体育館、プール、フィットネスジムなど様々な設備を兼ね備えたオールインワンのスポーツ施設である。震災後は原発事故収束の前線基地として使用されていたが、その後施設の復旧工事が行われ、今年7月28日に一部営業再開を果たし、9月8日には全天候型練習場がオープン、来年4月にはグランドオープンを予定している。

日本サッカー協会とJリーグは原発事故のあった福島県に支援するため、2017年3月に「DREAM福島アクションプラン」を立ち上げた。この活動を通し、この地域に夢や希望を与えられるような活動を行っていきたい。Jヴィレッジ営

業再開の意義は、福島復興のシンボルとして、風評被害の払拭、正しい情報発信などを行いながら、交流人口の拡大を図っていきたい。

西嶋 1997年、当時中学3年生だった私は関西選抜に選ばれたのをきっかけに、オープンしたばかりのJヴィレッジで合宿することができた。素晴らしい施設で全国レベルの選手たちと交流したことで、プロになりたいという夢が目標に変わった。Jヴィレッジは私にとって夢の原点であり、人生の中でも大切な場所。

現在、「JFAこころのプロジェクト」で夢先生として活動しており、学校を訪問し、夢を持つことやその夢に向かって努力することの大切さなどをゲームと体験談を通じて子どもたちに伝えている。月に1度は町内のサッカー教室にも参加し、地域の子どもたちにできることはないかと地道に活動している。

上遠野 私は以前、広野中学校に6年間赴任していた時期があり、子どもたちにラグビーの楽しさを伝えるため、休み時間にタグラグビーを行うなどの活動をしていた。福島県は残念ながらラグビーが盛んな地域ではなく、中体連に加盟できるラグビーの団体がいないため、中学生は県内に数カ所のラグビースクールに通うしかないのが現状。そうした状況のなか、ラグビーができる環境が整っているJヴィレッジの施設は1つの魅力になるのではないかと考える。

来年、ラグビーW杯が日本で行われ、福島県がキャンプ地に内定しているが、もし、Jヴィレッジが合宿地になれば、この地域の人たちは本当に羨ましい。ぜひホストタウンとして町全体でおもてなしをして、ラグビーだけではなく、スポーツの素晴らしさが地域に根付いてほしい。

磯部 私がラグビーを始めたのは中学生の時に上遠野先生に出会ったのがきっかけ。現在は自治体職員としてラグビー普及に向けたサポートをしていきたいと考えている。

Jヴィレッジはサッカーの聖地として広く認識されているが、今後はラグビーをはじめ多くのスポーツに利用してもらうことが必要になってくるのではないかと考える。福島県やいわき市ではスポーツ活動への助成事業やトップスポーツの合宿誘致活動などを積極的に行っている。こうした事業を通して、地域の子どもたちがスポーツに興味を持つきっかけを作ることが重要だと考える。

渡部 私は2015年からふたば未来学園高校のレスリング部の立ち上げに関わり、3年間教員として指導を行った。もともと浜通りにはレスリング部はなく、部員も2人からのスタートではあったが、目標としていた全国大会出場を果たし、3年間で軌道に乗せることができたと感じている。当時は広野中学校の剣道場を借りて練習していたが、隣では地域の人たちが小さな子どもたちに剣道を教える姿があり、本来のスポーツの良さを実感した。ぜひレスリングもこの地域で愛されるスポーツになってもらいたい。

これまでJヴィレッジでのレスリングの実績はないが、体育館にレスリング専用のマットを敷けば競技はもちろん、子どもたちのマット運動のスペースとしての活用なども考えられる。

2 クロージング(まとめ)

地域振興におけるスポーツ活用というテーマから議論を行い、この地域において「Jヴィレッジの活用」がキーワードになることが分かった。

まず、来年全面再開を迎えるJヴィレッジがサッカーだけではなく、多くのスポーツが行える施設として可能性を見だし、トップ選手はもちろん、地域の子どもたちが気軽に利用できるような施設として活用できれば、スポーツを通して地域を盛り上げていくことができるのではないかと考える。

また、今後予定されている、ラグビーW杯や東京オリンピック・パラリンピックに向けて、Jヴィレッジを拠点として、全国・海外から多くのスポーツ関係者がこの地域を訪れることが予想される。その際に、町はホストタウンとして交流事業などを企画することで、住民を巻き込んだ形でスポーツの魅力が地域に根ざしていけるのではないかと考える。

サイドイベント

◎広野中学生映像作品上映

日時 常設 場所 広野町公民館(研修室1)
制作 広野中学校1年生

概要

広野中学校1年生が自らテーマを立て、取材を通して地域の課題や魅力を知り、カメラのフィルタを通して伝える映像制作教育「シネリテラシー」に挑戦し、完成した作品を上映。

◎広野町の戊辰戦争

日時 常設
場所 広野町公民館(研修室1)
主催 広野町教育委員会



概要

戊辰戦争150年の節目である今年、戦の舞台となった広野町と周辺地域の歴史に関する展示

◎広野町へのリクエスト

日時 常設
場所 広野町公民館(エントランス)
主催 広野町復興企画課



概要

参加者に広野町への意見や要望などを自由に書いていただくためのリクエストボードの設置

◎呈茶席

日時 平成30年10月11日(木)
場所 広野町公民館(エントランス)
担当 猪狩宗成ほか



概要

広野町裏千家同門会によるフォーラム参加者へのお茶と菓子によるおもてなし

◎広野火力発電所・IGCC紹介

日時 常設
場所 広野町公民館(研修室1)
主催 東京電力フュエル&パワー株式会社
広野火力発電所



概要

広野火力発電所敷地内に建設中の最新発電設備IGCC(石炭ガス化複合発電)の紹介展示

◎全国支援職員の自治体紹介

日時 常設
場所 広野町公民館(大会議室)
主催 広野町復興企画課
(広野町支援職員協力)



概要

広野町支援のために派遣いただいている職員の派遣元自治体の紹介パンフレットやポスター展示

◎参加自治体(東京都北区、埼玉県三郷市、越谷市、神奈川県茅ヶ崎市、静岡県掛川市、岐阜県岐阜市、鳥取県日吉津村、宮崎県宮崎市、福島県、復興庁)

◎スポーツ報道写真展

日時 平成30年
10月12日(金)~14日(日)
場所 広野町公民館(エントランス)
主催 広野町復興企画課



概要

主要な国際大会で躍動する日本選手の一瞬を切り取ったスポーツ報道パネルの展示

交流イベント

◎ふたば未来学園高等学校 農業・商業実習販売

日時 平成30年
10月12日(金)、13日(土)
場所 広野町公民館前
主催 ふたば未来学園高等学校



概要

ふたば未来学園高等学校農業・商業グループによる、広野産みかんを使った「みかん大福」やゆず味のパウンドケーキ(檜葉)など、双葉郡を代表する特産品を使った商品の販売

◎福祉施設 食品販売・雑貨販売

日時 平成30年10月13日(土)
場所 広野町公民館前
主催 社会福祉法人友愛会
ワークセンターさくら
岬学園



概要

ワークセンターさくらによるこんにゃく製品、加工味噌等の食品販売と岬学園によるビーズアクセサリー等の販売



ふくしまから
はじめよう。

Future From Fukushima.



第5回 国際フォーラム

～「被災地」から「復興知」へ～ [報告書]

Living in Disaster Affected Areas gives Living Sapience



□編集・発行／広野町復興企画課 www.town.hirono.fukushima.jp/